

大学初年次段階における市民参加教育 (FYCE) の 意義と可能性 —ハリー・ボイトのシビック・エンゲージメント思想を 手がかりとして—

藤枝 聡¹

立教大学, 東京大学

Significance and Potentiality of First-Year Civic Engagement (FYCE) for University Curriculum Innovation: Based on Harry Boyte's Political and Educational Thought

So FUJIEDA

Rikkyo University, University of Tokyo

近年のアメリカの大学初年次教育 (FYE) において、コミュニティでの経験学習を通じたシティズンシップ教育を取り入れる動きがある。この動きは、2008年に「初年次教育における市民参加」すなわち First-Year Civic Engagement (FYCE) として概念化され、FYE の新たな領域として注目を集めている。FYCE が出現した背景には学生の政治参加の停滞が顕著となった当時の社会的状況があるが、学士課程教育や大学のあり方そのものをめぐって FYE の役割がより高度化していることの表れとしても読み取ることができる。

本稿では、FYCE の概念および実践上の特徴を考察し、これをシビック・エンゲージメント論を牽引するボイト (Harry Boyte) の思想と理論に照らしてその意義と可能性を明らかにすることを目的とする。まず、FYCE がサービスマンシップ等によるコミュニティへの参加を通じた自己効力感の醸成や学習態度の形成など、これまでの FYE と比較して新たな教育目標を設定していることを明らかにする。次に、1970年代以降の FYE の発展過程の中で2008年に出現した FYCE の史的含意を考察する。ここでは FYCE が、21世紀初頭までに形成された FYE の重心的な目標であるアカデミック・スキルの習得を引き継ぎつつも、シビック・エンゲージメントに関する教育目標を志向していることを明らかにする。さらに、こうした FYCE のねらいが、ボイトのいう政治的シティズンシップ教育や、大学本来のミッションの再構築を志向する理念と不可分であることを示す。その上で、FYCE がこれまでの初年次教育論が融合して独自の教育活動の体系を形成している点が FYCE の最大の意義であることを明らかにする。最後に、ボイトの思想を通じて捉えた FYCE が、「大学の脱機能主義化」を実践する可能性を提起する。また、この点から、FYCE が今後の FYE の機能をさらに拡張する役割を持ち得ることを示す。

FYCE のカリキュラム、教授法、学習成果の評価方法など個別の論点、さらには教育思想における位置付けを明らかにすることが今後の研究課題である。

¹ 立教大学国際化推進機構, 東京大学大学院教育学研究科博士課程 fujieda@rikkyo.ac.jp

[キーワード：FYCE, シビック・エンゲージメント, シティズンシップ教育, サービスラーニング, ハリー・ボイト, 市民の行為主体性, 大学の脱機能主義化]

1. 問題の所在と目的

1920年代に始まったアメリカの大学初年次教育は、70年代後半から80年代にかけてその形態が多様化する中で、First Year Experience (FYE) と称されるようになった(山田, 2009)。近年のFYEをめぐる特徴のひとつに、地域社会での経験学習を通じたシティズンシップ教育を取り入れる動きが挙げられる(たとえばJames & Hudspeth, 2017)。その背景には、アメリカの学生における政治的関心や参加の停滞という社会的状況がある。FYEを理論と実践の両面で牽引してきたひとりであるガードナー(John Gardner)は、FYEにおけるシティズンシップ教育を「初年次教育における市民参加」すなわちFirst-Year Civic Engagement (FYCE)として概念化し、その重要性を主張する(Gardner, 2008)。

FYCEは、特に2000年代以降、AASCU(全米州立大学協会)加盟の120大学が共同でシビック・エンゲージメントの要素を組み込んだ初年次教育のガイドライン作成に取り組むなど、その裾野が広がる中で概念化されるに至った(Gardner, 2006)。日本においては、サービスラーニングやボランティア学習を初年次教育と関連付ける実践がみられるようになってきているが、まだ初年次教育学領域においてFYCEそのものを考察の対象とする論考をみることはできない²。18歳選挙権の導入さらには18歳成人制の検討が進むなど、「大学生になること」が「成人になること」と同じ意味を持つようになる中で、FYCEは日本の大学教育改革を考えるための重要な視座となる可能性を秘めている。

そこで本稿では、まずFYCEの概念および実践上の特徴を整理する。そして、1970年代以降のFYEの発展過程について3つの時代区分を設定してFYCEが出現する史的含意を考察するとともに、シビック・エンゲージメント論を牽引するボイト(Harry Boyte)の思想に照らしてFYCEの初年次教育論上の意義と課題を考察することを目的とする。

2. FYCEの概念的特徴

(1) 初年次段階に社会参加の要素を組み込んだ経験学習

アメリカの初年次教育において、FYCEが初めて登場したのは2008年である。同年に発表された*First-Year Civic Engagement*と題するモノグラフの序章及び終章において、ガードナーはシビック・エンゲージメントにもとづくシティズンシップ教育を柱に据えた初年次教育を、'First-Year Civic Engagement'として初めて提唱した(Gardner, 2008)。ここでガードナーは、まず、学生の成長は初年次段階に積む諸経験(大学での学び方、時間管理法、教員に対する態度、人間関係、市民参加等)によって規定されるという、初年次教育の新たな視点を明らかにした。その上で、特に地域社会の多様な主体との協働を通じた経験が「知的な何か」さらには「教室外での教育的文脈」を獲得させることにつながるとして、そのためのシティズンシップ教育を初年次段階のカリキュラムに組み込むこと、すなわちFYCEの有効性を主張する(Gardner, 2008: 2-4)。

FYCEは、その理論的基礎をシビック・エンゲージメントの概念に置く(Gardner, 2003: 2006)。1990年代以降、アメリカの大学経営には自由主義的な原理が侵入し、アメリカの大学における普遍的教育理念が空洞化しつつあるとされる。シビック・エンゲージメント

は、サービスマーケティングなど地域社会と連携したシティズンシップの涵養を通じて、この理念の再興を主眼に台頭した概念である。FYCE が登場した背景には、グローバル化に伴い学士課程教育に要請される能力要件が多様化していることが挙げられる。しかし、より重要な背景として、学士課程教育において教育成果を定量的根拠にもとづいて説明する責任が問われる流れに対して、カリキュラムや教授法さらには大学キャンパスのあり方自体を問い直すという問題意識が存在することに注目すべきである。

(2) FYCE の教育内容と目標

FYCE の導入と実践は、アメリカの学士課程における教養教育、すなわちリベラル・エデュケーションの改革を推進する文脈の中で広がりを見せている。例えば Schamber & Mahoney (2008) は、20 世紀のリベラル・エデュケーションが科学的知見の獲得を重視したのに対して、21 世紀は社会的責任と市民参加の促進に目的を置くべきとして、初年次教育に短期型の地域学習プログラムを導入する有用性を主張する。また全米カレッジ・大学協会は、2005 年に設置した LEAP (Liberal Education and America's Promise) プロジェクトの中で、チュートリアル型科目中心だった教養教育カリキュラムの設計思想を柔軟化するための具体策として、初年次教育におけるサービスマーケティングの活用を提唱した (AAC&U, 2007)。これまでサービスマーケティングは、上級学年を対象に導入されることが多く、ゆえに応用的な教育手法であるとされてきた。しかし近年は、基本的な講義や演習を組み込むなどした、FYCE としてのサービスマーケティングの開発と実践が進んでいる (Smith et al., 2011)。

FYCE の特徴的な実践例として、北アリゾナ大学 (Northern Arizona University; NAU) の CRAFTS (Community Re-engagement for Arizona Families, Transitions, and Sustainability) プログラムがある³。NAU では、低年次学修期のコースワークとして FYLI (The First Year Learning Initiative) を導入している。FYLI は、学生が科目開講直後から主体的に授業に参加できるよう、支援・指導・教育方法・フィードバック等の条件を備えた科目群として構成されている。CRAFTS は、この FYLI の一環として「社会協働型演習」という初年次科目として開講されている。CRAFTS を履修する学生は、水問題、地域エネルギー経済、移民、学校におけるシティズンシップ教育、代替的食糧システム、人権、草の根民主主義など、約 25 種類の調査研究プロジェクトのいずれかに参加し、その全体の過程を通じて市民活動の技法であるコミュニティ・オーガナイズングについて学習する (Boyte & Scarnati, 2014)。CRAFTS の目標は、まずコミュニティの活動に参加することが問題改善に直接的に結び付き得ることを学生が経験的に理解することにある。そしてもう一つの目標は、その経験を以降の学修に接続することを学生が習慣化することにある (Coles & Scarnati, 2011)。

このように CRAFTS では、コミュニティへの参加を通じた自己効力感の醸成や学習態度の形成といった、従来の FYE にはみられない教育目標が設定されている。

3. FYCE の萌芽と展開

これまで FYE の一貫した課題は、トロウ (Martin Trow) のいう大学の「ユニバーサル・アクセス化」に伴う学習習慣の未定着、無目標、低意欲に起因するリテンション率の維持向上、すなわち早期退学者数の最少化にあった。Koch & Gardner (2006) は、1970 年代の

学生の多様化に伴う教育の成果志向への転換によるリテンション概念の台頭、1980年代の学習成果の可視化への要請、さらには1990年代以降の多文化主義への対応と学習・発達領域への特化等、FYEはそれぞれの時代状況に合わせてその形態を発展させてきたという。では経験学習の手法を中心に据えるシティズンシップ教育であるFYCEは、これまでのFYEとの連続性や親和性をどのように担保し得るだろうか。

この点について、以下ではまず、ファーガソン(Aaron Ferguson)の論考を参考に、FYEのアプローチが多様化する過程を3つの時代区分に整理し、そこからFYCEの特徴を明らかにする。そして、FYCEがこれまでのFYEの目標を拡張的に捉えているという特徴に着目し、FYCEがFYEの発展史の連続線上に位置付けられることを明らかにしたい。

(1) 第1期：1972年～1993年—学習の動機付けを主眼とする学力低下論への対応

周知のとおり、FYEの発祥は1972年のサウスカロライナ大学においてガードナーが開講した「University 101」科目であるとされる。その背景には、ベトナム戦争の反戦運動等により学生生活が不安定化したことを受けて、学生の授業出席の確保や授業態度の改善など、学業生活の平常化を図るというFYEのねらいがあった(Gordon, 1989)。

そして、これ以降の1970年代から1980年代のFYEは、大学生活や学習への積極的態度の涵養という当時のニーズにもとづいて、主に学力低下への対応として学習への動機付けをねらったプログラムを中心に組み立てられた点に特徴がある(Ferguson, 2006: 1)。

(2) 第2期：1994年～2007年—アカデミック・リテラシー重視の質保証とFYCEの萌芽

学士課程教育における説明責任への要請の高まりを受け、1990年代以降のFYEプログラムは、1994年のAACによる提言を踏まえる形で、アクティブラーニングを活用したアカデミック・スキルの習得へと重心が移行した(Ferguson, 2006: 2)。

そして、これと並行してもう一つの議論が進行した。すなわち、学生の学問的・社会的無関心の拡がりを受けて、市民性の涵養をFYEに組み込む必要性が論じられるようになったのである(Sax et al., 1999)。これについてファーガソンは、「成功する学習者」として学生の成長を促すというFYEの理念を捉え直す意味でも、アカデミック・リテラシー重視のFYEプログラムを、「アカデミック」「パーソナル」「シビック」という「ホリスティック」な目標をもつプログラムへと発展させるべきとする(Ferguson, 2006: 6)。そして、その方策として、初年次学生に特化したサービスラーニングの導入を提唱する(Ferguson, 2006: 3-5)。

ファーガソンのこうした問題意識と重なる知的営為は、2002年に発表されたモノグラフ *Service-Learning and the First-Year Experience* にみることができる(Zlotokowski eds., 2002)。1980年代からサービスラーニング推進の中心的役割を担ってきたズロトコウスキ(Edward Zlotokowski)を編者とする本書には、初年次教育プログラムとしてサービスラーニングを体系的に組み込む意義や方法論などについて実践的研究者が寄稿している。特にガードナーはその巻頭言の中で、自身がズロトコウスキの影響を受けて、「University 101」科目の中で既に1995年からサービスラーニングを実施している言及している。このことから、21世紀初頭の段階において、FYCEの端緒が萌芽していたとみることができる。

(3) 第3期：2008年～現在—FYCEの出現

ガードナーが2008年に提唱したFYCEの概念は、こうした文脈の中から出現した。そ

して、FYCE が提示されて以降、2010年代においても関連する議論が続いている。例えばFeldman & Zimbler (2011) は、現代のFYEの目標として「アカデミック・スキルの向上」「キャンパス生活への適応」「自己探求の動機付け」「人間的発達」という4つを挙げる。そして、この目的を実現するために、コミュニティサービスの要素を組み込んだ社会的実践を伴うFYEプログラムの重要性を提唱する(Feldman & Zimbler, 2011: 11-12)。これらとFYCEの関連性については明示されていないものの、初年次段階における地域社会での経験が学生の成長を規定するという、FYCEの有効性をめぐる先述のガードナーの主張と符合している点から、これもFYCEに包含される目標設定として理解することができる。

このように21世紀初頭以降のFYE研究からは、FYEの重心を依然としてアカデミック・スキルの習得を通じた学修の円滑化に置きつつも、その教育目標を学生の社会参加を加えたより複合的なものへと転換することを目論む主張を読み取ることができる。その意味でFYCEは、FYEの教育目標が多分化しつつあることを示す概念として性格付けられる。

4. FYCEに内在するもう一つの可能性—ハリー・ボイトの思想を手がかりに

市民として社会に参加するための資質を高めること、すなわち市民性の涵養に教育目標の基礎を置くFYCEが、FYEにおいてもつ意義とは何か。ファーガソンやフェルドマンらの論考で示された「シビック」や「サービス」という視点は、たしかにFYEの新しい目標である。しかし、これらが含意する教育の具体的な思想や目標の内容について、これまでのFYCEの議論の中では明確に言及されていない。言い換えれば、FYCEの主眼である「シビック・エンゲージメント」がFYEの思想や実際のプログラムにどのように受容されたのか、あるいは受容され得るのかは依然として明らかになっていない。

そもそも、シビック・エンゲージメントの概念及び定義は1990年代以降、現在に至るまでアメリカ国内で論争の対象となってきた。したがって、FYCEの思想的含意を正確に理解するためには、同時代におけるシビック・エンゲージメントの解釈を踏まえることが重要となる。また、Butin (2006)のように、FYCEの主要な教育手法であるサービスマーケティング等に対する懐疑的指摘がある中で、FYCEの方法論が有すべき条件をシビック・エンゲージメントの最新の考え方にもとづいて確認することが必要である。以上の点にもとづいて本節では、シビック・エンゲージメントの概念形成を牽引してきたアメリカの政治教育学者であるボイトの思想⁴を手がかりに、FYCEが持つ新たな教育論的意義を考究する。

アメリカでは1990年代以降、政治参加の停滞や新自由主義の席卷によるデモクラシーの退廃が指摘されるようになった。ボイトは、これが大学の専門主義化と商業化を招来し、アメリカン・デモクラシーの牽引役を担ってきた大学の使命そのものが空洞化していると指摘する。そして、大学教育の原初的機能であるシティズンシップ教育の再興を通じてアメリカの社会形成に寄与すべきと主張する(Boyte, 2004)。こうした危機論を受けて台頭したのがシビック・エンゲージメント運動(Civic Engagement Movement)である。シビック・エンゲージメントとは、1990年代以降に活発化した学生ボランティア活動、地域サービス活動、民主的討議、多様性尊重の取組など、シティズンシップの涵養を目的とする教育を推進する活動を総称したものと理解される(Saltmarsh & Hartley, 2012)。このシビッ

ク・エンゲージメント運動が一つの背景となり、前節で整理したように、サービスマーケティングに代表される教育手法が学士課程教育に組み込まれるようになったのである。

ボイトは、さきに FYCE の事例として紹介した CRAFTS が、シビック・エンゲージメントの概念にもとづいて、新しい FYE の可能性を示唆する実践として高く評価する (Boyte & Scarnati, 2014)。特にボイトが評価するのは、CRAFTS の教育目標である。ボイトは、シビック・エンゲージメントの教育目標は「市民としての行為主体性」(Civic Agency) の獲得にあるという (Boyte, 2009)。そして、CRAFTS はこの「市民としての行為主体性」の獲得を目指して実施されているとボイトは指摘する (Boyte & Scarnati, 2014: 83-85)。

ここにいう「市民」とは、政治参加の条件として一定の資質や資格を求められる存在とは異なり、アメリカのコミュニティ自治の文化を形成してきたごく普通の人々 (ordinary people) を想定する。そして「行為主体性」とは、「市民」が自らの関心にもとづいて身近な公共的課題の改善や解決を日常生活の営みの一つとする「もう一つの政治」(a different kind of politics) に関与しようとする意志、関心、態度、技法等の総体として定義する (Boyte, 2009)。ここで目指されるのは、学生自身が「市民」として、生活領域から公共的な課題への関与を深める経験を獲得する教育である。

ボイトはポスト福祉国家的状況におけるアメリカ民主主義の停滞要因について、代表制政治システムへの信頼の揺らぎを意味する「垂直型政治不信」よりも、公共的課題に対する効力感の欠如による市民相互の信頼関係の揺らぎを意味する「水平型政治不信」の影響を重視する。この「水平型政治不信」への対応こそが「もう一つの政治」であり、アメリカのシティズンシップ教育にとっての命題であるとする。この意味において市民としての行為主体性とは、市民代表 (act on citizens) に代わる市民間の協働 (act with citizens) を社会的に実現するためのシティズンシップの源泉として理解されるのである (Boyte & Fretz, 2011)。

21 世紀に入り、シビック・エンゲージメント運動は、学生の社会的無関心がむしろ進行するという想定外の事態に直面し、それまでの教育成果をめぐって相次いで問題提起を受けることとなった (Sax et al., 1999)。ボイトは、この要因の一つに、奉仕やボランティアという行為自体が自己目的化あるいは義務化していく目的論的な流れにシビック・エンゲージメント運動が半ば回収されているという危惧を示す。そして、こうした状況であるからこそ、「水平型政治不信」を反転するために必要な「市民としての行為主体性」の獲得を目論む政治的シティズンシップ教育を展開する CRAFTS の価値を特筆するのである⁵。

そして、ボイトが CRAFTS を高く評価するもう一つの理由は、CRAFTS が初年次教育プログラムであると同時に学士課程全体への広がり意図してデザインされている点にある。この点は、初年次の早期段階で社会的な協働経験を得る必要性を説くガードナーの主張と符合している。特に CRAFTS のような政治的シティズンシップ教育については、初年次教育の段階から展開するのが教育効果の点で最も有効とされる (Stroup et al., 2013)。これと同様に、「実践的政治の基礎や、市民としての行動が欠けているからこそ、初年次学生がシビック・エンゲージメントの野心的な教育対象になる (傍点執筆者)」という論考もある (Neathery-Castro, 2003: 79)。これらの主張は、ボイトの「学士課程全体への広がり」という視点と接続するものである。よって、FYE の目標はあくまで学士課程全体を通じ

て達成すべきものとして位置付けられ、FYCEはその始点の機能を担うという構図に帰結する。

さらに、ボイトはCRAFTSの履修学生がその後もコミュニティとのつながりを保ちながら自身の問題関心に沿った地域学習や貢献活動を展開している点を挙げ、これがNAUの教育全体の社会的レリバンスを高めている点も等しく評価する。CRAFTSを通じてNAUのキャンパスそのものが市民性を帯びることで、シビック・エンゲージメント運動が企図した「社会に開かれたキャンパス」(Engaged Campus)という、失われつつある大学本来のミッションの再構築をも実践しているからである。FYCEはたしかに初年次教育の一概念である。しかし学士課程教育の導入部のみを断片的に担うのではなく、学士課程教育全体の改革を牽引する機能を担い、そのことを含み込んだ包括性のある概念と捉えるべきである。

このように、新たに登場したFYCEの姿をシビック・エンゲージメント運動というトレンドから照射するとき、そこには「政治」に接近しようとするシティズンシップ教育と、そしてその先にある大学それ自体の市民性を高めようとする理念型としての大学像が浮上する。学士課程教育の思想は、アメリカ社会全体を覆う市場・競争原理の導入による民主主義の毀損に紐づく形で、数値化可能な学習成果やこれに依拠する構成主義的学習観に傾倒しつつある。FYCEは、こうした潮流を根底から問い直そうとする理念と分かちがたく結び付いている。この点を踏まえて、さきにみたファーガソンがいう「ホリスティック」な目標の意味を再解釈するならば、それはボイトが意図する政治的シティズンシップを基軸に、その教育プロセスにおいてアカデミック・スキルや人間的発達を有機的に組み合わせたFYEオリジナルの教育目標として理解できる。すなわち、ボイトのいうシビック・エンゲージメントの政治性と、これまでFYEが積み上げてきた初年次教育論の融合による独自の教育活動の体系にこそ、FYCEの最大の特徴がある。

以上から、FYCEがいわゆる奉仕教育の早期化や地域貢献の義務化という表層的文脈とは異質の原理にもとづいて新たなFYEの機能を担いつつあることがわかる。一方で、教授法やカリキュラム体系、実施体制などからみたFYCEの実効性はまだ不透明である。これまでのFYEとの具体的な接続に関する方法論についても提示されておらず、直面する課題も多く存在している。FYCEの発展に向けてFYCEの実践が蓄積されることが期待される。

5. FYCEが拓く「大学の脱機能主義化」の地平

ここまでボイトの思想を手がかりに、FYCEには政治的シティズンシップを涵養し、学士課程全体への教育や「社会に開かれたキャンパス」づくりへの広がりを経由して大学を本来のミッションへと回帰させようとする志向性が内在することを明らかにした。こうしたFYCEの志向性を、「大学の脱機能主義化」の議論に接続する可能性がここに浮上する。ここにいう機能主義とは、大学の知的活動が「社会」からの「ニーズ」に効率的かつ忠実に応答するという「機能」性を最も重視する思想であり、20世紀後半のアメリカの大学像を批判的に表象する概念として用いられてきた(松浦, 2014: 265)。これに対して、大学が最も重視する価値を実現するために、大学と社会の関係をもう一度組み直し、大学の知的活動を主体的に再生産しようとするのが脱機能主義の考え方である(松浦, 2014: 266-

267)。アメリカのあまねく大学が「最も重視する価値」の一つは「民主的市民の育成」である。そして、この「民主的市民の育成」という価値が機能主義化により希釈される状況を反転させようとしたのがシビック・エンゲージメント運動であった。この運動は、ボイヤー (Ernest Boyer) の *Scholarship of Engagement* (1996) による問題提起が発端となって、建国期そして1862年のモリル法を経て根付いてきた普遍的ミッション (Civic Mission) への回帰を目指す大学改革運動へと昇華した歴史をもつ。この歴史からも、シビック・エンゲージメントそしてFYCEは、大学の脱機能主義化を目論む実践の一形態として顕現したものと理解できる。

既述のとおり、大学教育の大衆化への対応や中退防止を原初的目的として、アカデミック・スキルや知識習得を相対的に重視してきたFYEは、ある意味で「効率」や「成果」という文脈と整合を図りながら進化を遂げつつも、常に機能主義化に晒され易いという宿命を帯びている。グローバリズムの影響を受けて大学教育の「機能主義」化はさらに加速する。それと同時にFYEへの要請もさらに高度化するだろう。こうした状況にあってFYCEの出現は、脱機能主義化の文脈から今後のFYEの機能をさらに拡張する役割を担う可能性を備えている。我々は、この点にこそFYCEの存在意義を見出すべきである。

本稿では、FYCEの基本的な枠組み、教育目標について考察を行い、新たな初年次教育の可能性を展望した。FYCEのカリキュラム、教授法、学習成果の評価方法など個別の論点、さらには教育思想としての位置付けについては今後の研究課題としたい。

注

- ² 過去の初年次教育学会の大会発表及び学会誌においてシティズンシップ教育をテーマ名に明記した研究発表としては、例えば、得丸智子「初年次教育におけるシティズンシップ教育の可能性と限界—教育的公共圏『さくぶん.org』の試み—」(第9回大会, 2016年9月11日)があるが、FYCEを直接取り上げた研究はみられない。
- ³ FYLIの情報は、NAUの公式ウェブサイト“FIRST YEAR LEARNING INITIATIVE”に拠る。URL: <http://nau.edu/provost/vp-tlda/fyli/>(アクセス日: 2018年4月25日)
- ⁴ 日本においても、政治と教育の関係性を捉え直す議論の中でボイトのシティズンシップ教育論が取り上げられるようになってきている。これに関する代表的な文献として、例えば小玉(2003)、小玉(2016)を参照されたい。
- ⁵ こうしたシティズンシップ教育と政治的主体化の関係性は、近年の大きな論点の一つである。ガート・ビースタ (Gert Biesta) は、教育の3機能として「資格化」「社会化」「主体化」を挙げるが、「シティズンシップ教育が、我々が政治的主体と呼ぶもの—すなわち、単にあらかじめ定義された鋳型の再生産についてではなく、政治的行為主体をまじめに受けとめるある種のシティズンシップの促進—に貢献することができ、そして貢献すべきかどうか」が現代シティズンシップ教育に問われるとして、政治的主体化の可能性と不可能性の議論を欠くシティズンシップ教育の問題点を指摘する (Biesta, 2010)。

参考文献

- AAC&U (2007) *College Learning for the New Global Century*.
- Biesta, G. (2010) *Good Education in an Age of Measurement*. Paradigm Publishers.
- Boyte, H. (2004) *Everyday Politics: Reconnecting Citizens and Public Life*. University of Pennsylvania Press.

- Boyte, H. (2009) *Civic Agency and the Cult of the Expert*. Kettering Foundation.
- Boyte, H., & Fretz, E. (2011) Civic Professionalism. Saltmarsh, J. & Hartley, M. (Eds.) *To Serve A Larger Purpose; Engagement for Democracy and the Transformation of Higher Education*. Temple University Press, pp. 82-101.
- Boyte, H., & Scarnati, B. (2014) Transforming Higher Education in a Larger Context: The Civic Politics of Public Work. Levine, P., & Soltan, K. (Eds.) *Civic Studies*, Washington, DC, pp. 77-90.
- Butin, D. W. (2006) The Limits of Service-Learning in Higher Education. *The Review of Higher Education*, **29** (4), 473-498.
- Coles, R., & Scarnati, B. (2011) Supporting Students through Community Connections. Association of American Colleges & Universities. *Diversity & Democracy*, **14** (3), 15.
- Koch, A., & Gardner, J. 佐藤広志 (訳) (2006)「アメリカにおける初年次教育の歴史」濱名 篤・川嶋 太津夫 (編)『初年次教育—歴史・理論・実践と世界の動向』丸善, pp. 13-43.
- Feldman, R. S., & Zimbler, M. S. (2011) Engendering College Student Success: *Improving the First Year and Beyond*. The McGraw-Hill Research Foundation Policy Paper.
- Ferguson, A. (2006) Making the Case for Service-Learning in First-Year Programs. *The Vermont Connection: Vol. 27*, Article 9.
- Gardner, J. N. (2003) The First-Year Experience as the Critical, but Often Neglected, Foundation for Civic Engagement. *Campus Compact Reader*, **4**, 10-16.
- Gardner, J. N. (2006) "Integrating Civic Engagement and the Times to Improve the First College Year," In New York Times, retrieved on March 31 of 2018 from http://www.nytimes.com/ref/college/collegespecial2/coll_aascu_gardner_pov.html
- Gardner, J. N. (2008) Civic Engagement: The Transforming Theme for the First College Year. LaBare, M. (Eds.) *First-Year Civic Engagement: Sound Foundations for College, Citizenship and Democracy*. New York: The New York Times, pp. 1-4.
- Gordon, V. P. (1989) Origins and Purposes of the Freshman Seminar. Upcraft M. L., & Gardner, J. N. (Eds.) *The Freshman Year Experience*. San Francisco, CA: Jossey-Bass, pp. 183-197.
- James, P. & Hudspeth, C. (2017) How Do You Take Learning Beyond the Classroom in an Interdisciplinary First-Year Seminar. *New Directions for Teaching and Learning*, **151**, 79-95.
- 小玉重夫 (2003)『シティズンシップの教育思想』白澤社
- 小玉重夫 (2016)『教育政治学を拓く：18歳選挙権の時代を見すえて』勁草書房
- 松浦良充 (2014)「脱・機能主義の大学像を求めて」『近代教育フォーラム』, **22**, 151-167.
- Neathery-Castro, J. (2004) Civic Engagement in the First-Year Experience: Developing Civic Literacy. *Metropolitan Universities*, **15** (4), 77-84.
- Saltmarsh, J., & Hartley, M. (2012) To Serve a Larger Purpose. Saltmarsh, J. & Hartley, M. (Eds.) *To Serve a Larger Purpose: Engagement for Democracy and the Transformation of Higher Education*. Temple University Press.
- Sax, L. J., Astin, A. W., Korn, W. S., & Mahoney, K. M. (1999). *The American Freshman: National Norms for Fall 1999*. Los Angeles: Higher Education Research Institute.
- Schamber, J., & Mahoney, S. (2008) The Development of Political Awareness and Social Justice Citizenship through Community-Based Learning in a First-Year General Education Seminar. *Journal of General Education*, **57**, 75-99.
- Smith, B. H., Gahagan, J., McQuillin, S., Haywood, B., Pender Cole, C., Bolton, C., & Wampler, M. K. (2011) The Development of a Service-Learning Program for First-Year Students Based on the Hallmarks of High Quality Service-Learning and Rigorous Program Evaluation. *Innovative Higher Education*, **36**, 317-329.
- Stroup, J. T., Bunting, H., Dodson, K., Horne, M., & Portilla, J. (2013) Promoting a Deliberative and Active Citizenry: Developing Traditional First Year College Student Political Engagement. *College Teaching*, **61**, 116-126.

- 山田礼子 (2009)「大学における初年次教育の展開：アメリカと日本」『Quality Education』, 2, 157-174.
- Zlotkowski, E. (Eds.) (2002) *Service-Learning and the First-Year Experience: Preparing Students for Personal Success and Civic Responsibility*. Colombia, SC: University of South Carolina.